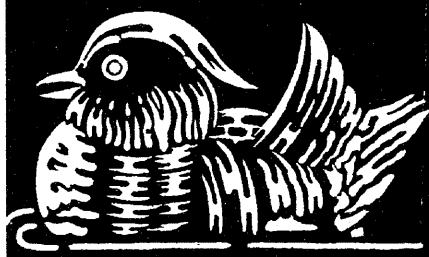


鸛文化圖



LA91
I

[illegible]

文叢 每月一回十五日發行一部郵稅共三錢五厘

郵券代用一割増爲替は常陸山田郵便局宛

は毎月懸賞を以て大に諸君の投書を募る

滿天下青年諸君夫奮て金篇玉章を投ぜよ

文壇は小説文章新体詩和歌漢詩の投書を歓迎

其投書規定は半紙半面十行廿四字詰とす

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

發行所 茨城縣行方郡津澄村吉川櫻水吟社

社長 大久保平八郎

副社長 近藤 潔

[illegible]

1

[illegible]

のやうな介の書生の手によつて、我が鴛鴦文學會

立せしむ。鴛鴦文學は發刊せらるゝのたゞで、

であらう。或る一部の人士から、本會の前途につい

杞憂を抱かれるのも、必ずしも理由のないことでは

ののである。

決して營利主義から出たので

なくつて、飽く迄も眞摯に熱心に、文學を研究しお

といふ外は、決して他念はないのである。

之が爲には多大の負

勞力も、決して厭ふ所ではないのである。

われくが起つに就ては、それ丈の準備もあ

主た覺悟をなす。取て力の衰走。舊の弊。自國の

かゝるアイデアを世人に懐かしむるの止むを得

わが埼玉文壇を悲むのだ。

を擧げてわが前途を見れば、恐るべく、憂ふべきこと

多し。又時には言

100

100

—

吾人の覺悟

愛人

忽然として起り、忽然として倒れるのは、これ實に地方雜誌の常態ではないか、その發行の辭に、大言壯語に吹き立てたその舌の根のまた乾かぬ中に、いつの間にか消えて仕舞ふのが、殆んど例のようになつて居る、それ故世人をして地方雜誌とし言へば、一も二もなく三號雜誌の運命に、陷るもの、様に思惟せしむるに至つたのは、我等の深く遺憾とする處で、且つ又地方雜誌界に於ける一大恨事として、我等は頗る悲の念に堪へないのである。

前號にも言つた通り、わが埼玉に於ける文學雜誌の運命は、實に言ふに忍びぬ、情ない結果である。即ち渠等の多くは、かの三號雜誌の例に、漏れなかつたのであつた。

かやうな不祥な、面白くない歴史を、有して居るわが埼玉の地に、信用もなく、經驗もなく、學識もない我

々々のやうな一介の書生の手によつて、我が鴛鴦文學會は創立せられ、鴛鴦文學は發刊せらるゝのだ。であるから他人からは無謀とも見ゆるうし、又大膽とも見ゆるであらう。或る一部の人士から、本會の前途について杞憂を抱かれるのも、必ずしも理由のないことではないのである。

併しながら、われゝが本會を創立し、本誌の刊行を企てたといふものは、決して營利主義から出たのではなくつて、飽く迄も眞摯に熱心に、文學を研究しやうといふ外は、決して他念はないのである。

それ故にわれゝは、日夜本誌が無事健全に發達し行かんことを望むのみであつて、之が爲めには多大の負擔も、勞力も、決して厭ふ所ではないのである。

勿論、われゝが起つて就ては、それ丈の準備もあるし、また覺悟もある。敢てかの朝起暮倒の哮喘的團體の、轍を踏まざらんことを誓ふのである。たいわれわれは、かゝるアイデアを世人に懷かしむるの止むを得ざる、わが埼玉文壇を悲むのだ。

眼を擧げてわが前途を見れば、恐るべく、憂ふべきこととは、多々あるので、決して平々坦々とは言ひ難い。時にはいろゝの困難にも遭遇しようし、又時には言

文園 毎月一回十五日發行一部郵税共三錢五厘
郵券代用一割増爲替は常陸山田郵便局宛

文園 は毎月懸賞を以て大に諸君の投書を募る
滿天下青年諸君夫奮て金篇玉章を投せよ

文園 は小説文章新体詩和歌漢詩の投書を歡迎
其投書規定は半紙半面十行廿四字詰とす

募集旨意書及優待法入用者は郵券封入申込むべし

發行所 茨城縣行方郡津澄村吉川 櫻水吟社

社長 大久保平八郎
副社長 近藤 潔

ふに忍びざる悲境に、沈溺することもあるであらう。が、併し安心し玉へ、われらの決心は堅忍不拔、確たるものである。些々たる挫折や、小障礙は、未だ以てわれらの決心を、挫くに足りないのだ。われらはそういう困難に遭遇したならば、ますます奮つて力を盡さうと思つて居る。

男子一たび志を決して起つ、何物かよく之を遮るものゝと、既に僕の述べた處だ。陽氣の發する處金石も亦透る、精神一たび到らば何事か成らざらんとは、これ豈古哲の金言ではないか。僕等もとより篤であるが、幸にして男子に生れた甲斐には、一片の氣骨がある、又自信がある。區々たる世の毀譽褒貶の如きは、敢てわれらの關する處ではない。畢竟世の中は、盲目千人に目明一人位の割合だ、して見れば多くの盲者が、何と言はうとも、われらには何等の痛痒をも感ぜぬので、たい一人の目明から、識認せらるれば、われらは満足するのである。

もしまた以上の言を、法螺だと貶す奴があつたらば、法螺として置いて差支はない。要は實行にある、われらは空論を排して、實行を尙ふもの、たい今後われらの行動に徴して、この言の眞偽を判定して貰いた

いのである。

以上は前號に述べた處と、聊かも變りはないのだ。それを長々とこゝに述べ來つたのは、少しく理由のあることだが、それはこゝに明言せぬ。猶ほ言ひたい事もあるが、まづ、今回は之で止めて置く。

猶ほ一言言つて置くことは、本誌は會員諸君の機關だといふことである。従つて、本會の盛衰も、本誌の進歩も、皆一に會員諸君が盡力せらるゝと否とに依つて、分るゝのである。記憶し玉へ、本誌は予等同人の所有ではないことを、われはくれぐれも、會員諸君の盡力を望むのである。

日光の一日

太田元綱

暇なき身の思ひ立ちて、日光へと向ひつるは、今年神無月の半ばすぎにて、秋風のそよ身にしむころなりけり。例の嵐車にて今市を過ぐ。

群山のうへに聳えて白雲の

かゝれる峯や二荒めを山。

夕つかた日光に着き、東照宮に詣づ。輪奐の美しくしき

は言はでありなむ、普く世の知るところなればなり。旅宿にかへりて、あくる朝、

少女子が黒髪山をけさ見れば、

心ひかる、朝げしきかな。

けふ一日の旅なれば、ぬ見む限りは見はやさむとて、疾くいであちて大谷川をわたる。

紅のわけの御橋のればしに、

朝日はさして見る目まばゆき。

大日堂に詣で、含滿の淵に臨めば、溪流岩に碎けてすさまじきに、不動の石像泰然としてねはします、いと尊し。

馬返しを過ぎて溪流をのれば、山逼り、水激して、紅葉絶壁に錦を織り、瀧また紅葉の錦を縫ひて、めざまし。

削りなす岩はの山の峯も尾も、

めざむるばかり紅葉しにけり。

立田姫織れる錦を白糸の、

瀧は縫へどやうち亂るらむ。

谷川の水のながれに紅葉に、

ふりれもしろき山の眺めや。

しばらく行きて茶亭あり。遙かに二すぢの瀧を望む。

大なるを方等の瀧といひ、小なるを般若の瀧といふ。それより山路をのぼりて、漸く華嚴の瀧に近づく。此あたり楓樹數ねはくして紅葉じたり。

錦織る紅葉の下を行く人の、

顔まで照れる心地こそすれ。

嶮しき崖路を下りに下れば、瀑布あり、白雲の瀧といふ。

足曳の山のかひより白雲の、

なびくと見しは瀧にありける。

前面にかゝりたるは鵲橋なり。長さ二十間あまり、崖より崖に渡したれば、高さこそまた只ならぬが、瀧の響きにうちゆるぎて、眼もほどく眩むばかりなり。

かさゝぎの渡せる橋かけに人の、

かけしものにはあらじと思ふ。

かくて華嚴の瀧を見る。拙き筆の能く及ぶところならねば、其ありさまはこゝに畧さつ。

れどろく瀧こそ落つれ國つ神、

二荒山根もゆるぐばかりに。

かへさは、馬返しより左に折れ、木樵に裏見の路を尋ねて、漸く瀧の傍らに至る。

旅人の袖もしどに濡れにけり、
世をばうらみの瀧のしぶきに。
日は傾きぬ。

いつまでも見てあらずしを現身の、
憂世の我ぞうらみなりける。
日光停車場に歸りて、家路に就く。見まほしき瀧さは
なれど、行かまほしき處あまたあれど、けふ一日の旅
なるをいかにせむ。
いづらば名こも惜しき黒髪の、
山にひかれてまたも來て見む。

外祖福田府君墓表

裕齋川島得太郎

君諱彝英。福田氏。通稱新右衛門。號黃鶴齋。其先治部左
衛門尉君諱胤詮。天正中仕成田氏長於武藏忍城。食采百
貫。氏長亡。移其采埼玉郡樺田村。爲編戶以終焉。子新
右衛門君諱胤義。慶長中爲割役。寛永中。藩主阿部侯忠
秋憂成田氏遺臣爲氓者。跋扈於舊采。往々不奉命。增置
割役三人。選名族有威信者充之。分爲四部。各針制一部。
以禦其亂。而新右衛門君爲之首。子孫世襲焉。數傳而至

新右衛門君諱惟永。是爲君之皇祖。有二子。曰
惟久。曰惟房。是爲君之皇考。惟久沒無嗣。皇考
承古橋氏。娶樋口氏。生君。乃以君承宗。時君
年甫十歲。無幾松平侯忠堯代阿部氏。庶績更
張。民心蕩搖。而君年尙少。家道寢衰。
遂視其職。以其世功也。禮遇如故。君大感
奮。儉素自奉。兢兢業々。十年如一日。家道復
興。上下信孚。遂復舊職。既而國步頻艱。驛傳兵
賦之事。蝟集如織。而君誠忠廉潔。當職不懈。明
穎果決。事無淹滯。侯嗟賞之。增俸賜金及物。至
廢藩置縣罷職。而給俸如故。尙參郡務。娶岡安
氏。舉三男三女。長惟重先沒。次惟壽亦沒。並明
類有材幹。人皆惜之。季輝義。承酒卷氏。嫡孫彝
謙亦先沒。乃養叔之弟敬孝爲嗣。配以孫女。女
一則嫁町田氏。一則爲儼之所生。一則嫁五十幡
氏。當時君不弔相接。繼嗣皆不得壽。而君處此
夷如。讀書點茶插花以自娛。又殊愛梅。屋東植
數百株。花時則會親戚故舊。優游詠吟。殆若不
解人間有憂愁之事者。其偉度可見矣。明治二十
年十月十三日。病沒。享年七十有七。葬阿彌陀
寺先塋之次。外祖妣亦性行端淑。內治有法。慈

而喜施。後君四年。壽八十有一而沒。儼也。雖無似。少長於
膝下。薰陶撫字之恩。優渥曷尙。當表其墓也。聊叙平素云
爲之一二。以答之云。

中村櫻溪曰。詳細叙出。不遺餘力。外祖君不朽矣。

花薔薇

雲 外

夜雨ひそかに濕ひて美人の眼新たに媚びたる如く、曉
風ゆるやかに吹ひて不言の唇先づ笑めるに似たる花薔
薇、其逸香、其清姿、又何にか類ふべき。
珠の白露を含みつゝ重さに絶えでうなだれたる面は
宛然われにかつが如く、吾胸の雲をばらひ吾身の塵
を洗ふて床しくも又懐かし。

覺せず下り立ちて一枝を手折らんとすれば、こはいか
に鋭き刺はしたゝかに我を傷けぬ。

床しくもこほるゝ笑のうち深く、

何とて薔薇の刺かくすらん。

實に想はざりき、汝がやさしき笑の裡に、斯くも恐ろ
しき刺あらんとは。

笑ふもの眞に笑ふにあらず、泣くもの眞に泣くにあ

らず、彼等の裏面には最も恐ろしき秘密の刺あるなり、
現今の人間世悉く夫れ斯の如く、實に夫れ斯の如し。

古道

近藤雲外

花に涙を漣ぐあり 月に思を碎くあり

世は只思の一つなれ

憂事積れど望むあり 爲吏風流と歌ふあり

世は只悟の一つなれ

思へば斯世も火宅なり 悟れば凡夫も佛なり

吾に血あり情あり涙あり

血は化して熱となる 情は變じて誠となる

涙は出て、愛となる

吾か自主の此の精神

吾が健武のこの手腕

天地にかくるゝソルースも

智もて彼をば歌はせん

意もて彼をば舞しめん

是が我が住む皇國の

古く傳はる道ならん

菊

竹 圃 生

降りも定だぬ此の頃の空のけしきは、恰も五月頃のやうなり。三日やうく晴れつゝきたりと思ふ間もなく、又今日も降り出でんまなるに、何となく心もむすばれて、文などくりかへし見るにこれ倦みはてぬ。つゞくとして居けるに、日頃親しき東江ぬしの來りて、例のわが手植の菊は、今花の眞盛りにつき、けふ二三の友を招きて、觀菊の庭を開くべければ、せちに来て見よ、ねむころに申されければ、午後二時頃より西口といふ所なる、東江ぬしの菊の園に至りぬ。今年は日で雨つゝきなどの、片よりたる時候にて、殊に培養に力をつくされたるものとて、そのしるしは見えていつもよりは面白く、花の種数は二百餘種なれど、花壇に出したるは百五十ばかりのよし、いづれも今をさかりに咲きいで、花の錦と葉のみどりと相うつりて、さながら眼もかやくばかりなり。雪燈籠などいへる花の、ま白なる中にうす赤く燈のほのかに見ゆるもおかし。あるは異人のひけなどいへる、

さながら西洋人のひけの如し。千代の松のゆかしく、松葉なりに咲けるもあり。白瀧の谷間より落つる、夏猶は寒きまなして垂れたるなき、あでやかにうるはしく、其の外武藏野、濡島、末廣など、一々名をかたきりてやさしき姿、何でも言ひがたし。名を覺ゆるさへ容易ならぬことなり。さて眺めつくして、日も西の山の端に落ちかゝる頃、あるじにしろるべせられて、設けの座につらなれば、皆親しき人々はかりにて、杯のめぐりゆきつゝ、花のことよりつれて、世のさまざまのはなしにうつり、覺ゆる夜をふかしてこそ、己が家に歸りしが、枕につきたる後も、なほ菊の花のうるはしき姿、眼を去らざりき。

放言一束

金剛成佛

(一) 文士——修養——引句

かゝる陳腐な題で、僕の下手な筆で、何も人を面白がらせる事は出来ぬ。されど「色をも香をも知る人なし」僕のははらぬ筆も讀む人は讀んで呉れるだらう。文士。云迄も無く其中には吾人の模範とするに足る

人物が數々あらうと思ふ。然し茲に云のは、所謂青年文豪である。世が文明に成たせいでもあらう歟、近來此種の文豪が、ヨナの飄蕩の様に、我國に生じた。これは實に僕も喜ぶ、けれ共彼等の多くは實に其内實を洗へば呆れ返る者で有る。見よ、彼等は果して如何程の思想を有する歟、否、少く共彼等が文に綴る文句の、エメントは悉く彼等の腦から出た者であらうか。戦争を論ずる文章を作つた男がある——名も碌々知られぬ三號雜誌の名譽員に成つたり、つゞらぬ支部長杯にも成つた事もあり、又そこらこゝで懸賞文の一等とか二等とかうれしい當選に成つた事もある人——其人は常にフランクリン曰くどかシェークスピア云はすやどかゲーテ、バイロン、ホウイチャアと無暗に泰西諸文豪、偉人の片言隻句を擔ぎ出すのだ。尤も英米の文豪詩人の書いた本の中の句なら、彼もナショナル第一四讀本ぐらゐは直譯の御手傳で讀んで居るだらうから先づいて、ユリゴー、ゲーテ、シルレル等の言は彼は恐らく何から見附け出したのか。諸君は知らるゝだらう美文資料、美文自在の様な本から引き出したのである事。凡て文章にはまじめで表から書くのがあり、又

は少しひねくつてサタイア的に裏から云ひまはすものもある。又前後の文勢上色々に普通の文章と仕組を違へるのが有る。夫れをどんな趣向に書いた本のどこにあつて、眞意はどうか。又其言は言た人の主義を悉く表白して居るか（即ち其言を取て少なく共其人の主張を窺はせる事か出来るか）位は知らないでは、其人の爲に賊ではあるまいかと思ふ。確に道德上不當な所爲では無いか。或人は本の名を人の名と間違へて、何々曰くどすまして書いたので、大變笑はれた事もある。これ等はむしろ憐むべき話である。僕はこんな人の言ばかり引抜いて居る浮薄文士を桂庵的文士と云て居る。桂庵的文士の少し氣の利いたのは、引句の意がドーかコーか分て居る輩である。然し此輩とて無暗に引句を行て、だれそれ曰とやるのは桂庵先生と同一である。僕は此輩の所爲は卑屈極まる者として、自ら秘書官的文士と名附けて置く。その意味は云はず共分て居る。斯様な文士ばかり居るのだから、當に文壇に耻ざらしを爲すのみでなく、人の修養時代を空しく徒費してしまつて、やゝさな人間に成て仕舞のが多い。實に道德陵夷の今日憂ふべき事ではないか。我が鴛鴦文學會の會員諸氏は修養は文士の一大義務たる事を知つて、

我々として勉め彼の桂庵、秘書官と成らぬ事を希望致します。斯く申す金剛生も社會の形式的レベルからは頗る低い者であるけれども日々修養に勉めて、兼ての僕の希望を果す積で居るです。

和歌四首

金剛 成佛

山に登りて

山に登りわが心今開きけりうき世のことを箱庭と見て

笛

細き穴に大なる理想吹き込て清き審美を現はすや此道

女を詠す

やよや君自然の美妙知りて後我袖引き玉へ情語り玉へ
あなうたて怪しき歌は誦しながら一言も語らぬ此美の人

俳句

奇北選

魂祭芭蕉にさはる雨の音

月湖郎

磯の灯や水死の人の魂祭

星會や親に遇はざる小傾城

薇山

尾崎紅葉、幸田露伴の三氏なり。これ兎に角近來の美譽と云ふべし。たゞ三氏に向つて、われは初日の出に於けるが如き結果を、再びせざらんことを、切望して止まざる也。

●與謝野鐵幹 曰く、(前略)われ及びわが同人の詩は、皆この自我の上に立てるもの、われら何を苦んで、他人を崇拜し、他の詩風を模倣せんや。われにはわれの詩興あり。(中略)こは假にも、古人今人の口眞似には非ずと、宜いかな言。鐵幹既にこの意氣あり、歌界革新の事たる。又必ずしも難事なりとせず。今や歌壇の大勢、はゞ定まらんとす。好漢鐵幹幸に自愛せよ。
●大町桂月 再び京に歸り、樗牛の後を襲ひて、筆を太陽に執り、傍ら中學世界をも監督す。意氣例によつて壯に、縦横に文界、教育界の近事を評論して、頗る痛快を極む。果ては川渠は村夫子に化せる者は非る也。
●近來忌まはしき報導の、來りて我が耳をうづもつもの二あり。一は川崎柴山の詐偽取財、一は眉山風葉の酒狂之れなり、あゝ文士の墮落一にこゝに至れる耶、吾人は轉た悵然たらざるを得ざるなり。
●紅葉山人 専心金色夜叉の續篇に執筆し、露伴松魚と共に微塵藏の續篇を出ださんと聞く、文壇の近事大

山寺の風なく落つる熟柿かな
田舎から大根もらひぬ夷講 桂川
人集ふ庫の二階や夷講
初冬や農會開く村役場 天行
木枯の中を走るや田舎馬車
寄懷子規先生 奇北
ガラス戸に幔を張りけり冬の雨
例會を閉ぢて鶏頭の尙赤し
自贈
霜月の有卦に入る日や小豆飯

次號課題

行年 十二月卅日〆切

次々號課題

新年 一月廿日〆切

殘紅零錄

葦舟郎

●大阪毎日 賞を懸けて小説を募る、選者は坪内逍遙、

に多望なるものあり。
●近時文士 にして、海外に遊ぶもの多し、これ誠に欣賀すべし、由來島國的文學は大國民を作る所以に非ず、予はこれ等の諸氏によりて少くも在來の弊習たる島國的根性を脱するに至らんことを望むもの也、往けや諸氏、歐山米水は到る所諸氏が吟腸を大ならしむるものあらん。
●土井晩翠 十二月の帝國文學に、十九世紀を送ると題する、長篇の新詩詩を出ださんとす、斯壇落莫たるの時、吾人は空谷の梵音を聞く感なくんば非ず。
●小天地 題する文學雜誌、大阪に生る、宛として新小説の弟の如し、吾人は切にその健全なる發達を祈る。
●高山樗牛 將に歐洲留學の途に上らんとして、不幸肺患に罹り、遂に渡航を見合せて静養す、文壇の爲め深く惜むべし、而して更に氏自身の爲に見る、更に一層同情の念に堪へず。
●江見水蔭 の濫作眞に驚くべし、山來濫作は進歩を沮礙す、水蔭たるもの宜しく反省する處なかるべからず。
●豪いかな 三宅青軒大人?? 大批評家にして大俳人

たり、好男子にして、艶福家なり、大難題問答家にして、大小説家なり、その他情歌、狂句、狂歌、骨董、劇評、一として君のよくせざる所なし、あゝ三面六臂、何ぞ必ずしも驚くに足らんや、豪いかな青軒大人！
●小杉天外 近來我々として怠らず、かのほつ姿を出だしてより、また女夫星を出だす、渠が文壇に忠なる深く多とすべきなり。

●泉鏡花 大坂毎日に三枚續を出だす、而して渠は之が爲に多くの讀者を失ふに至るまで、最も力を盡して、渠の特色を發揮したりき、壯なるかな鏡花。之と共に吾人は幽芳が、全く商略を離れて、この天才をして充分に筆を奮はしむる志を、多とせずんば非ず。

●春陽堂 が文學に忠なる、いつもながら、感服の至なり。先月には、天外の女夫星、松葉の亡國星を出版す、文壇の寂寥なる今月、我々として單行小説を出し、爲に少なからず、吾人をして満足せしむるの功、決して尠少にあらずるなり。

秋夜漫吟

蓬香居士

秋宵宜醉又宜吟。不識人間名利心。窓外聽蟲々唧々。階前觀月々沈々。

秋江口占

蓬香居士

閑步微吟傍水湄。漁家斷續閉柴扉。暮鴉亦愛秋光好。

草又句(綱)

一。縹緲殊便欲仙。舊作猶留苔壁上。新歡多在酒樽前。三旬賜暇何多幸。日浴恩波萬斛泉。

老谷曰名聯。中洲曰余亦新歡中一人然病中禁酒君幸不惡客視之感々謝々。青霞曰舊草作舊詠如何。

每見作詠々如何(綱)

溪山秀麗擁樓臺。每見繁華向暑催。寄傲謝安携妓到。養痾潘岳奉親來。千峯雨色翠如滴。萬壑松聲濤欲頽。勝地賸看靈液湧。何須求入蓬萊。

中洲曰前聯與雅後聯清爽。青霞曰雨色作雨氣如何。

倚遍林端百尺樓。風光總向望中收。赤城高壓群山出。綠野平分一水流。雲氣去來晴亦雨。瀑聲奔激爽於秋。作夏如秋如何(思)溪非實景作泉如何(綱)奔激作斷續(綱)夏如秋泉左祖朱批(綱)

詩成未盡登臨意。滿目蒼茫暮色愁。

老谷曰前聯雄渾今人不能道。一六曰前聯千古妙句。

青霞曰作豪傑未盡登臨與暮色蒼茫來入吟如何。

(修批)

人如世外作初知仙境(綱)

(境)

小窩依稀小洞天。人如世外日如年。雲蒸虎魄俄生白。茗冷幽棋漸入玄。六月碎冰盛玉碗。前林起霧濕微絃。

啼向丹楓多處飛。

過古戰場

涼景口吟錄其二

越後

岱哉

五十嵐傳吉

野水斷橋行路難。淒風淒雨送征鞍。羈人來吊須磨寺。古戰場荒月影寒。

同

和韻

蓬

香

崎嶇山路幾艱難。一味微涼月照鞍。憶起錦衣公子恨。松風村雨笛聲寒。

野渡曉色

岱

哉

曉來雨霽水烟新。楊柳青々不染塵。十里長堤涼正好。噪蟬聲裡喚舟人。

同

和韻

蓬

香

水風吹送曉味新。似拂波頭楊柳塵。青靄模糊柔櫓響。景光一半在舟人。

詩學金針

裕齋手錄

香山雜咏

故人

川島梅坪

也作又如何(綱)殺僕則欲依舊(綱)

也趁幽期入碧山。溪回路轉有人烟。十年重到眞疑夢。

隣厨晚有香魚餽。曲鼻銀鱗上俎鮮。

霞紅山紫暮光凝。出浴欄干曲處凭。匠匠吞頭人忽簇。

參差樓外月初昇。過雲歌闌連番曲。照夜毵明萬點燈。

身在熱場還不熱。玲瓏心地冷于冰。

老谷曰二聯道盡香山風景。中洲曰洵然。

成齋曰過雲歌闌連番曲。夜浴客殊苦之今如此叙去却似可愛。青霞曰作歌管樓々曲珠璣戶二燈如何。

簡練精緻尤見才力余在此十餘日欲絕句紀勝未能公乃以七律出之智愚相距何啻三十里老谷陳人源元禮妄評首々精練有巧思有風韻能道盡香山實況余得詩殆三十首皆粗笨無味乃知多而粗不若少而精評畢嗟若者久之庚辰八月十四日夜識于香山聚遠樓時隣室皆就寢唯聽湯漕泉聲與酒樓絃聲相和耳中洲隱士三島毅拜五篇中々篇最高妙亦城綠野天然好對而措語宏壯純然唐調末篇清麗蓋亦其次也其他語句佳處則評備焉成齋釋妄評
名作駢々如此香山爲增光華第三第五二首最爲合作一六居士修敬讀于香山晚翠樓
余久聆香山之勝而未及一游常以爲憾今讀此佳作恍如身在曲欄廻樓中而與山色溪聲相對何等快筆何等神韻

眞香山一幅撮影者非耶敬服々々辱知水野忠雄潜評
余未至香山故不能辨此什能寫眞與否若其句練字熟則
可求匹於古作者耳庚辰初八夜妄評於東京環碧樓覺宿
痼頓愈南摩網紀

僕が書齋

但馬月湖郎

書齋と云へば書齋だが、九尺二間の野茶屋住居にも劣
つた一と間、これが僕が書齋なのである、
箱火鉢茶簞筥茶盆猫鼠云々の、流行歌には些かまざつ
て居るか、併し之れも分らぬさ、
其の東の一隅には大きくもあらぬ、書籍箱、文筐など
が、チヤンと行儀よく据ゑてある、それには近刊の物
ど、讀みがらしの本や雑誌が、區別してあるのもおか
しい、其の傍には文机がある、硯、墨、筆、及び筆立
ての外には何も見ぬ、筆立の銘彫刻、貝細工は僕が
常に誇つて居る所だ、四壁には扁額も掛つて居らぬ、
掛軸も見ぬ、只四季様々に挿しかえて楽しんで居る
花瓶がある、此頃は小萩の花がいと淋しげに散りが
てにしてある許りだ、片隅の柱には備忘録だとか、何

々だとか張り付けてある、それに隣りして古曆も、散
置の好具たる獵銃までが、帽子其外の日用品と並んだ
外は、たゞ柱時計の絶えず時を刻むのみである、
次は前庭の景色

●秋の夕様の端にいで、うちなが
め居けるに清らかなる月大空に
のぼり見るからに限りなき感慨
の胸を突いて湧き出でほとく
夜の更くるも知らず思のまゝを
詠みける

竹園生

あすしらぬうき世の中に月ばかり
むかしも今もかはらざりけり
なき人の昔をさらにしのはれて
月の夕をかなしかりける
なつかしき友をいかにとたづぬるも
みそらの月は語らざりけり
共に見し月は今なほ變らぬぞ
かたりし人のなきがかなしき
今しはし眺むるほかに照る月の
光りをかくす宵のむら雲

我樂多録

馬 骨

●地方雜誌界も、少しは寂しくなつた。新たに發刊せ
られたものでは、鴛鴦文學、初霞、秋水、文星、など
その重なるものであるが、廢刊したものは、中々に多
いようである。
●先づ新文學は、本年五月十八號を出したきり、今に
至るも音沙汰がない。
●文壇、これもいつの間にか、廢刊してしまつた。
●多分、こたゑ儲けたらう、馬鹿を見たのは、支部長と
か顧問員とか、さも勿駄さうに擔ぎ上げられた連中だ。
●定めし今頃は目が覺めたらう、いやはや呆れたお利口
連だ、あんな奴に器械のように使はれるとは、ちと
しつかりし玉へ。
●活文字は、大分意氣壯んであつたが、やつぱり引込
んでしまつた。
●南海文壇は、九號きり音沙汰がない、これも全様な
運命に落ちたのだらう。
●ゆかり草は、一寸いゝ雑誌だつたが、やつぱり廢刊

◎今度は一つ、新刊の雑誌を評して見よう。
◎明治文園、駄載はあまり感服しないが、一寸見處のある雑誌だ、努めて怠るなかつたならば、將來或は見るべきものとなるだらう。だが、その批評がいかにも幼稚だ、まだ他人の文を、批評する程の資格はない。今少し審美的眼光を、養ひ玉へ。
◎青年文庫は、登壇の作物に、少しも感服するものがないのは、不思議ぢやないか。一体に見るべき記事に乏しい。
◎文星は、一寸いゝ雑誌だ。堀井汀水の幹する所ださうだが、どうか健全に發達して貰いたい。
◎初霞は、改良前の明星と同じ体裁だが、あまり感服しない。最も創刊の事であるから、嚴酷に評するのは氣の毒だが、二號からもう一ど奮發を願ふ。
◎秋水は、一寸氣の利いた雑誌だが、いかにも紙數が少いので、あまりにアツ氣ない。併し將來有望のもの一つだ。
◎青年詞壇は、相變らず盛んだったが、どうもその割には、あんまり讀むに足る作物がない。
◎智識の戰場は、文學雑誌ではない、併し八百屋的なには、感服しない。

青年の腐敗と論ず

金剛成佛

今や慘憺たる戰雲、北清を蔽ひて、天下の形勢實に吾人の憂患措く能はざる所也。吾人は今日の此の狀勢に就て何等の議論を吐くを得ざれども、吾人が數年の後に於て、堂々たる日本の一公民たる場合を豫期して吾人青年に就て論ずる、又必ずしも無用ならずと信ずる也。

回顧すれば早や兩三年の昔なれや、ストライキてふ

厭ふべき忌むべき事、流行せし事あり、當時天下幾萬の新聞雑誌は口を揃へてこれを非り、これを誨せしかども、尙此惡風を撲滅する能はず。天下の志士眉を顰めて私に將來を憂ふる所ありき。然るに移り移りて今日に至りては、唯の一度も所謂ストライキなるものを耳にせず、是に於てか天下の志士も漸く其憂世の筆を止めて、稍々安心せるもの、如し。
然れども、天下の志士仁人は、果してストライキの止みたる、只其一事も我事終れりと成すを得べきか。方今書生の意嚮を窺ふに、果して能く「活氣ある青年」と成りしか。是れ予が大に論せんとする所也。

青年は克己の心に乏し

今日の青年の心は恰かも扁々たる路傍の柳也。風若し東より吹かば西に靡く。眞如の月、其影を没し去りて、群妖勢を逞くする現今の世、彼等青年は毅然として特立獨行する事をせず。日に日に輕薄の風を學び適特立獨行の者も、其光輝を表さず、義を以て兄弟を盟ふの眞正的團體は極めて希にして、白虎隊といひ、蒼龍義團といふ如き野痴蠻愚云ふに忍びざる者、續々と出る事、雨後の竹筍の如し、吁又悲しい哉。日々諸處

青年と信仰

今日の教育は平た云は、片輪也。國家主義といひ、個人主義といひ皆管見たるを免れず。故を以て現今學校の内部的精進教育の如き、唯物論的極弊に陥り、生徒の良心を助け、惡に向うて、心を轉せざらじむる爲の好手段を取らずして、互に反目疾視するが如きは、

恰かも宋の朋黨の如き者にして、笑はざらんと欲するも得べからざる也。

宗教なる者が人心を裨補するは、古今幾萬の徴證に對して、明かに是を知るを得べし。世の一派の學者は宗教を以て惡魔と考へ、是を信する者を以て迷信家といひ、痴人と嘲ける。然れども千里眼を放つて其の腸内を見れば、汚穢不淨畜生と雖過ぐる無き者、比々として皆然り。哲學的思索……宇宙の絶對理想の研究……が着々其歩を進め、何千萬年何億萬年の後、世の文士が夢想するが如き福德一致の黄金時代の來らん事は何人とも否認せず。然れ共、吾人はこの何千萬年何億萬年を悠々と待つ能はず。必ずや其間に臨急の處置無かる可らざる也。社會の職業には活動的と沈靜的との二あり。依て青年の意中にも樂天的偏向と悲觀的偏向との二方面無かる可らず。然るに今の青年は甚だ樂天的なり、否、無意識的樂天的也。故に其目的とする所、曰く軍人、曰く商、曰く醫、自己の能不能は考へもせず、無暗に時流に投せんとす。其に英雄を論すれば其のウ・ライチー即換言すれば幻影的、活動的方面を認識するのみにて、其のユニターを悟了せるものは曉星も雷ならず。共に宇宙を談すれば予は助を他に求めず、予自

ら助くる也、而して其の心事や惡魔の奴隸なるもの比々として皆然り。斯の如くにして進まば、日本今日の腐敗は幾千萬年を経ども、匡正すべくも有らざるなり。如何にせば青年を救ふを得べきか。宜しく青年に宗教觀を與ふべし。

聞説く、軍人は多く禪を學ぶと。是れ宗教の助を借りて心膽を養ふに非ずや。予はかゝる流行が施て青年界に入る由もがなと思ふもの也。今日の青年は支那的の氣概主義磊落主義を悦ぶ。かるが故に着々として失敗せり。支那の氣概は甚だ妙ならずして、多くは假面的にして、イザ鎌倉と云ふ場合に成りて、忽ちペケとなるもの多し。繁劇なる今日の世、豈餘飯家の大へベケにて料理し得る者ならんや。

物質は精神より來る。精神的活動は物質的活動を抑へ附くるに足る。英國が未だにトランスヴァールを服する能はざるは、英國兵士には最高上なる精神的活動即血なる者、無ければ也。青年の心事も是に類す。精神上の理想は、耳目口鼻手足の區々たる運動の主宰なり。神は吾人の心的作用の統一也とバウルゼン云へり。故に神の教を奉ずるものは、己れに従ふ也。己れ自ら己を助けんとせば、先神に向ふて救を乞はざるべからず、

而して後に天國に至るべき也。沒良心的不信仰の沒義漢は、神を貴ぶるが故に、己れを貴ぶこと能はず。故に其行爲は不倫不徳也。嗚呼世の青年よ。將た是が指導者よ。青年の行爲を清からしめん爲には、決して區々たる行爲を云爲する勿れ。唯夫れ百の禁烟法例、千の禁酒法例よりも、一條の聖靈の火は、罪惡を剪除するに於て、百倍の功あるを思へ。

可憐なる失敗者

落々子

試験、試験、第一高等學校の入學試験、これは僕が多年心懸けて居つたのである。如何に僕は早く中學を卒業して、早く此の試験を受けたいと思つて居つたであらうか。

今年三月、僕は首尾よく、しかも優等で中學の業を終へた。多年の宿望を達すべき期は近きにありと、其喜びは、卒業した喜びに加はつて、恰も僕の身軀が、欣喜といふものゝ化身であるかの如く感ぜられた。僕は多年薰陶を蒙つた先生、多年螢雪の苦を共にした朋友に分れて、意氣揚々、人々の羨望を後にして、遙々出京の途についたのは四月三日、即ち神武天皇祭の日で

あつた。諸氏よ、恥かしながら東都に來たのは、今が生れて初めてある。瀛車が上野の停車場に着いた時は、只々茫然たるのみであつたが、氣を勵まして、豫て通知して置いた親戚の家に車を馳せた。親戚は其後丁寧に僕を待遇して呉れ、心弱き僕は、殆んど涙を流すのを、禁じ得なかつたのである。嗚呼、古郷を距る何百里、例令流車瀛船の便があるとは言へ、僕は之を思ふと、身は百有餘萬の稠人中にあるが、何となく心細くなつて來る。知つて居る朋友も、澤山こゝに來て居るが、噂に聞けば、大抵は都府の惡風に感染して、

何れも放蕩無賴の者となつたさうである。只頼むべきは此の親戚の主人一人のみである。されば學校、恩師、學友、父母、兄妹など、毎夜僕が夢に入らない事はない。心弱き僕、自分ながら女々しいと思つた事もある。僕は着京後一週間許り経て、主人の撰定によつて、ある英學と數學とを教へる塾に這入つた。此の後三ヶ月間の事は言はずもがなだ。只僕は敢て言ふ、此の花笑ひ鳥歌ひ、人將に狂せんとする中に、通學の外は一寸も、戶外に出でなかつた一人があつた事を。高等學校入學試験は、七月十五日より始まり、十一日で悉皆終りを告げた。

每月一回

十五日發行

但し第十號十月十五日既刊
○十一號十一月十五日發行

紙數菊到五十頁以上
○一部定價郵稅共五
錢五厘○半年分三拾
二錢○一年分六拾三
錢○郵券代用一割增
○爲替八下總譽田郵
便局宛○

本誌は毎號懸賞を以て諸君の投書を歡迎す滿天下
 青年諸君夫れ奮て金篇玉章を寄せよ。

本誌は天地人の三等に賞を與ふ但し天賞金壹圓、地賞金七拾錢、人賞本誌半年分。

本誌は投書の種類を小説、文章、新体詩、和歌、漢詩とす、投書規則は半紙半面十行廿四字詰。

本誌は購讀者十名以上の地に支部を置く、但し支部長は紹介者を以て任じ誌代を除き憂待す。

本誌は購讀者五名以上の地に盡成部を置く但し紹介者を以て是が幹事と爲し誌代半額優待す。

本誌は館友規則あり乞ふこれが詳細の規則は既刊の本誌に就て見られよ、見本一部限り五錢

發行所
千葉縣千葉郡
譽田村平山
二三省館

千葉縣千葉郡
譽田村平山

三
省
館

各諸國
大家贊
成

每月廿五日定刊
第八十號既刊

荷も歌をよみ詩文を習ふに欲する者は本誌を讀むべし本誌は東京始り
各國有名大家の賛成補助を得て毎月一回つ發行せる者なり既發號數の
多きも亦以て本誌の信用を證するに足れり而して其每號載する所論説
歌評文苑、雜義、叢錄、歌合、詩海、歌林、兼顧歌、黃點歌、詞錄、
雜錄等希くは斯道熱心の諸君幸に愛讀の榮を賜へ
●詳細の規約及び課題等は毎號の誌上に掲示す見本を要せらるゝ方は郵
券六錢を投ぜらるべし

發行所 大鳥居五十一番地 榎園吟社
 定 飲水は詩趣多く人をしてバラダイスに遊む學

水稲を沈帶せる死文壇の革新をはかり、強力新文士星

本誌は清潤新なる文壇専門雑誌

文年書
 遇し厚
 本誌は
 由なる
 血涙あ
 る文壇
 の文士
 速に一
 誦を賜
 へ
 爛擦

登の士々秋
發行所
安易町七
名古屋市中
天
蟹
社
頁てし

龍門
 冷や
 之
 前
 の急
 先鋒
 時界
 の羅
 井盤
 は比
 良成
 天の

力
 定
 價
 一
 部
 參
 錢
 郵
 稅
 五
 厘
 二
 部
 前
 金
 郵
 稅
 の海

共四十錢
 郵券代用
 不苦爲換
 名古屋局
 宛

止に二廿一舊調詩界に斬然として頭を抜きに
美文に韻文に新體詩に和歌に俳に詩に論說に輝

お嬢作 走馬 浮き草の縛屋なるよ

界を漫遊する快なり。春風駘蕩の頃ひ、花の吉野の彩霞に酔ふ快なり。翠滴らんとする緑陰に憩ひ、清泉に

俗塵を洗ふ快なり。月下、耳を虫聲に清ます快なり。積雪を踏んで、山野に狩する亦快なり。世上何物か快な

らざらん。憂ふる勿れ、傷む勿れ、泣く勿れ、悲む勿れ、我が身は是れ快の塊に非らずや。

然れども、水より清く、玉より美なる心もて、古人の畫を展る無限無境の快こそ、人生最大の快に非らずや。

余嘗て、讀書に就て、愉快なる說話あるを聞く。
ヘリッーペスロヂの書を阪邑に讀ひや、弊衣破襪、泰

然几坐し、小童五六、左右に侍して聽聞に余念なき有様、嚴父の愛兒に教ゆるが如く、諄々として更に厭倦

の色なし。

又山陽、自著桶峽合戰の條を讀み、覺えず興に入り自ら鉢卷をなし、床几に倚り、戰扇を揮ひ、舉手敵を差招くの狀をなし、或は音聲を發し、叱咤するの風をなし、戰況を眼前に躍如たらしめ、流るゝ汗を拭ひつゝ講談せしことあり。此時の山陽は、恰も戰場より凱旋せし壯者の如く、余勇凜々當りを拂ひしと謂ふ。是皆快の光明、身邊を圍繞せしに非らずして何ぞや。

又英國文學者ジョンモルレーが、『讀書は人の品性を作

る、其成就する事を忍耐して待つ可し。然れども、常に快樂の心を失ふ可からず。』と謂へり。

今や天澄み、氣清く、暑氣既に去て寒威未だ侵さず、神心爲めに爽かにして、人間煩累の何物たるを忘る。此

時徐ろに、几に倚り卷に對すれば、眼走り字飛んで、五行並び下る、況んや、月下燈に對し靜かに書を繙かば、

千載の上に遡りて偉人と語る可く、萬里の外に遊びて傑士と談ず可く、正に天工を奪ふ可し。

此時にあたりて、政治、法律書の理屈めける、地理、歴史書の事實づくめなる、文學書の意氣なる、數學、理學書

の煩繁なる、讀むとして妙ならざるはなし。

スハ來りぬ。

いざ是より諸君と共に、此絶好時節を以て諸觀察、新智識、新思想を養ひ、一步を進む事を得ば、如信書中祿萬鐘の快あらん。

山田圓月



ある程の書皆讀みつくしね。讀まざるには勝り、且又

面白き事もあらんかと、久しく打込みありし『新編武藏風土記稿』を引き出して、忍領の所なぞくろく擴げ見しに、圖らずも武藏の名所『小崎沼』の記事ありて、左の如く讀まれぬ。

○埼玉沼(附小崎沼)村ノ北ニアリ古ハ小崎沼或ハ埼玉津ナト云テニテ土地ノ大變革モアリシナルヘケレハ兎角論シカタシ姑今ノ形ニテイハンニ埼玉沼近キ頃マテモコトノ外調カリシカト享保ノ度ニ新墾シテ一旦皆水田トナリシカ寶曆十二年再其半ヲ穿テ元ノ如ク沼トセシモノ今ノ埼玉沼是ナリ潤サ東西三四町南北六町此邊十六村ニカ、レル惡水溜井トナレリ又埼玉津トイヘルハ昔入江アリシ頃ノ事ナレハ津ノ所在ハサシテ知ル可カラズ今ノ利根川ノ内ナラント云説アリサモアルニヤ今郡中會川古ハ上新郷ト上川俣トノ間ニテ二分シテ北流郡中ヲ延亘セリ彼會川ノ邊ニ古歌ニヨメル古江浦岩瀬ナト云所々ノ遺名ト覺シキ地モアレハカタ々々當時船ノ輻湊セシ所トハ知ラル然ルチ今土ハノ傳ニヨレハ小崎沼ノ邊コレ埼玉津ノ舊跡ナリト云埼玉沼ヨリハ二町許南ノ方ニテ長三間幅一間許ノ小池ナリ萬葉集(歌登池ノメクリハ島ニテ南ノ方纔ニ芝生テ小高キ所アリ上ニ寶曆三年癸酉九月忍城主阿部正因碑ヲ建テ此二首ノ歌ヲエリ土人ノ説ニ古ハ此沼埼玉沼ト續テ入江ナリ後世年ヲ逐テ埋ミ今ハ其形ノミ遺レリト按ニ村名ニヨリテ埼玉津ノ舊跡ト云説モ起リシナルヘケレト古歌ニ埼玉ノ小崎埼玉ノ津ナト讀ルトキハアナカチ當所ニ限リテ埼玉ト云ニハアルヘカラストニカク津ノ所在ノ如キ千歳ノ後ヨリイカチガ正シキコトヲ知ルヘカラン紫一本ニ埼玉津ハ足立郡見沼池ノ邊ナリト云ヒ武藏名所考ニモ埼玉津ハ此説ヲ踏襲シテ小崎沼ハ岩槻城下尾ヶ崎村ナラント云是皆臆度ノ語ト聞ヘテ

取カタン今按ニ郡中羽生町場ノ隣村ニ尾崎村アリ其邊多クハ沼田ナレハ是小崎沼ノ舊跡ナルヘケル思ハルコレシカチナカラ前ニモ云コトクナレハソノ實ハ知ルヘカラス
われは直ぐ眼と鼻の間に住ひながら、未だ一度も此名所を訪ひし事なし。そも今は如何なる有様なるべき、なほ水溜の如き小池ありて、僅かに昔の面影ありやなぞ、急に好奇心湧くが如く、折もあらば尋ね見んと思ひ立ちぬ。
數日經て村越天辰見へければ、これ幸と此事を謀りしに、そは面白しと忽ち相談整ひ、明朝出發とさまりぬ。
中
八月十二日。われは束装も濟みて、はや出掛ける計りなれど、如何してか天辰中々來らず。早朝五時と云ふ約束なるに、何をして居るならんと、獨り心を焦ちをりしに、七時に至り漸く來りければ、いかにして斯く遅はりし、と其寢坊をなれば、天辰一は言もなく恐れ入りぬ。
いざ急がん、と愈々出發しぬ。旭はぢりく、と遠慮なく斜に左の半身を照り付くれば、暑さ最と耐へ難く、佐間に至れば、已に流汗淋漓として背を潤はす。今更ら、邪魔なりとて洋傘を持ち來らざるを憾みぬ。

蕨帽に首かしげ、り日午なり。かくあらむと思ひし故、朝涼の中に立立んと欲せしに。と天辰を恨みむも甲斐なし。
漸くにして埼玉村淺間神社に達す。あまり暑ければしばし憩はんと、鳥居をくぐりて進めば、小丘あり。石階を得て登る、頂に社あり。祠は大ならされ共、周圍に、幾百歳を経たらんかと覺しき老杉、あまた生ひ茂ればひるなほくらく、いと神々しく、神威灼然と思はる。祭り奉る神は、木花開耶姫之命なり。一拜して社側に蹲居して憩へば、涼風徐ろに至りて汗顔に消へ、心地好きこと云はむ方なし。

涼しさや神の木立に汗拭ふ
休憩暫時、丘を下れば麓に池あり。傍らの茶店にて煎餅若干を求め、天辰と二人してちぎりと池に投ぐれば、大小の緋鯉、眞鯉多く浮び出で、むさぼり食ふ様いと面白し。

水面に鯉の浮ぶや夏の旅
やがて興もつきぬれば、漸く境内を立出で、行く。暑さは益々加はるのみにて、折角涼を納れしもまた、くひまに失せぬ。
何れにせ、そばを通るの故湯本君の宅へ立寄りむ。と

の天辰の發議に後ひ、細き道を曲りくねりて湯本氏の家につきぬ。門を入りて義雄君に面會を乞へば、一間に導れつ。斯くて一杯の茶に渴へたる喉を潤はし、巻煙草なんどふかしつゝ笑談する折しも、義雄君の父君、義憲氏も來られて閑談數刻、時の遷るを知らず。かくする中、最早午なればとて晝餐を饗せられぬ。厚志嬉しかりし。
午後一時。義雄君も共に、小崎が池指して出發しぬ。近道なればとて、畑と畑の道なき所を道として五六町行けば、前面の田の中に數本の樹木ある所あり。義雄君指さして、あれこそ小崎が池なり、と云ふ。予等足を早めて達すれば、あゝ小崎池!。所は、埼玉縣北埼玉郡埼玉村字埼玉……………
最と廣う見渡さる、田の中に、雜木二三本寂しく立てる、丘の如き小高き芝生あり。其傍に、一坪ばかり地の窪みて、霞の繁茂せる、底に些しの水を湛へたる小池(?)あり。是れが即ち、一千年前盛んに船舶の輻湊せし、武藏なる埼玉之津の名残なる。
實にや『桑田變じて碧海となる』と、古人の世の變遷を云ひけんは、眞に吾をあざむかざりき。『さきたまの小崎の沼に鳴ぞ翼さる、己が尾に降り置ける霜を掃ふ

とにあらし。『埼玉の津に居る船の風を痛み、綱は絶ゆとも言なれぬ。』と、萬葉集の詠ひけむも、今や、水あせ池埋まりて、更に昔日の俤を留めず、争でかはねざる鴨を見るを得べき、況して渡し船をや。

(此二首の歌に就ては岩崎教諭、前ノ歌ニハ小崎ハ沼トアリ水ノ溜リテ流レザルチ云ヒ津トハワタリトテ川ナリ海ナリ船ヲテ渡リ越スチ云フナレバ小崎沼ハ古クハ渡津ナリシガ後ニアセ埋リテ池沼トナレルカイと、云はれき。)あはれ、數十年の後は、此の凹地も全く田畑と化して、其所在長へに人の忘るゝ所たらん。

傳へ云ふ。昔おさなる女あり、此池に投じて死せり、故に池名をおさ池と稱す。而して、其怨懣凝りて、池に生ふる片葉の葎となれり。と、葎を驗むるに片葉もあり、兩葉の普通なるもありて一様ならず。又、片葉の葎も、植物學上毫も怪むに足らず。この俗傳素より信じがたし。

われは此の蕭條たる古跡に對して、今昔の感慨轉た止めがたく、もし詩才とやらあらましかば、何とかこの景をうたはむに、性來の不敏、空しく煩悶するのみにてかひなし。村の童等の惡戯なりけむ、樹の根もとに在る臺石の上

見武藏小崎沼鴨作歌

前玉之小崎乃沼爾鴨會翼霧己尾爾零

置流霜乎掃等爾有斯

武藏國哥

佐吉多萬能津爾乎流布爾乃可是乎伊

多美都奈波多由登毛許登奈多延會爾

右萬葉和歌集之哥二首

右側に、

寶曆三年癸酉歲九月望

武忍城主玉福阿部正因建

臣 之國平岩知雄書

とあり。

折しも夏日の常とて、俄におどろくと神鳴り渡り、空は一面に雨雲に覆はれ、悲風暗愴として寂寥たる光景一入物さび、樹木は嗽々たる聲をなして、恰もおさが亡き靈の現れ出で、當年の怨を訴ふるが如く、悲しむが如く、泣くが如く、恨むが如く、鬼氣陰々として人に迫らむやうにて、何となく恐ろしき心地せられ、氣味悪しき事限りなく、殊に今にも雨降り出でん氣色なれば、そこへ湯本君の家にひき返しぬ。雨は最早ばつりつとより來りければ、義雄君は、雨をやめ

に置かれたる、いしきみ池中に投げ込まれありぬ。出して碑文を讀まんと、三人共履をぬぎ捨て、池中に入り、之を引き上げんとするも、數十貫もあらんと思しき石、殊に低きより高きに上ぐるなれば力及ばず。さりとて、之を見れば、折角來りしかひなしと、互に勵ましめひ、渾身の勇を奮て一齊に力を籠めれば、一寸、一寸、又一寸、漸く五寸計上がりしが、手のゆるむと共には忽ち本に歸りぬ。こは如何せん顔見合せ、ほどはと斷念せむとせし折しも、農夫らしき二人の男、通りかゝりて此有様を見兼しか、共に力を添へ呉れたれば、やうやくにして丘上にあぐるを得たり。

かくて石碑の泥を拭ひ、鉛筆執りて碑文を寫しぬ。碑は方柱にして、正面に隸書にて

武藏小崎沼

と大書し、向て左側に、

古所在稱武藏小崎沼即是也所考證以萬葉和哥集矣自寛平五年癸巳歲至今爲八百六十九年蓋可知其古矣此地紛紜蕪中而既爲隱其所夫豈可不惜耶於是勒其池名於石以爲不絕不朽云

背面に、

て歸られよ、とねむるに留めらるれど、辭して雨傘借り受け、厚く謝して別れぬ。

下

雨はますます降りしきりて、衣服はひたぬれにぬれぬ。急ぎに急げば汗浸々としてわき出で、足はいよゝゝ疲れ、苦しさといはむかたなし。こは雨中の歩行よりも、寧ろ、往きに日に照されつゝあゆみしが遙に心地好し。なぞ打語らひながら漸く淺間神社の手前なる、

天辰の知人、某氏の家に達しぬ。

氏の家にしばし憩ひしが、雨やむべき模様なければ、意を決して立ち出でつ。なほ雨中を只管に急ぎ、天辰もわれも濕鼠の如くなりて、四時半頃、漸く鴛鴦なるわが茅屋にたどり着きぬ。

明治三十三年八月十三日、山田良三、月廼舎の北窓の下にします。

對燈獨語

薇 山

世人の讀書眼

予過ぐる日、伊原青々園の『新比翼塚』を讀みて、餘

りに下らなきに閉口して、終に閱讀を中止するに至りしが、何ぞ圖らむ、この下らなき作物は、『都新聞』讀者の歡迎せるものにして、現に數回書生演劇に於て演ぜられ、喝采湧くが如きものならむとは。この一事亦以て世人の讀書眼が如何に幼稚なるかを、知るに足るべきなり。

吾人はまた弦齋の作物が、最も多くの讀者を有し、露伴が讀者を有するの點に於て、終に弦齋に及ばざることを聞けり。更にまた錦織某の『闇の世の中』が、最も多くの部數を出したるを聞けり。

凡そ此等の事實、一として世人の眼が、猶ほ幼稚なるを證せるものに非るはなし、慨すべきに非ずや。

噫、渠等は未だ眞正の文學を、解するの力なきなり。淺薄なる講談、小供だましに過ぎざる弦齋一輩の小説（？）以外、何物をも理解するの力なき也。志あるもの誰か之を憤慨せざらんや。

あゝ憫む可きかな世人!!! 渠等は詩を知らず、美を解せず、又情を知らず、一生を走尸行肉の間に終るの徒のみ、寧ろ憫殺すべきに非ずや。

戯作者

戯作者といへば何となく卑しき感の起り來るは、必ず

の甚だしきか。

見よや、渠等の中には、今猶ほ戯作者の如く、品性なく主張なく徒らに俗尙に阿りて、『版元の忠臣』(この一句作者部類より借用す)たらんことを是れ願ふもの多きに非ずや、而して渠等は書肆より職人視せられつゝ、あゝるを知らざる也。

更に又渠等が學識のいかに淺薄なるかを見よ、玄關へ入れば直に裏口の鴨居に頭を打附けるとは、これ實に適評なるに非ずや。

又更に渠等の素行を見よ、通を衍ひ粹を氣取るその氣障さ加減には、誰か一見嘔吐を催さざらんや。

渠等は何の爲めに詩を作るか? 曰く虚名を貪らんが爲のみ、米鹽の資を得んが爲のみ。

米鹽の資を得んとするは可なり、文學者といへども人間なれば、雲を食ひ霞を呑みて生活し得べきに非ず、去れど之が爲めに、自己の本領をも沒了して、枉げて世の風潮を追ひて、少しにても多くの原稿料を貪らんとするが如きに至つては、斷々乎として之を排斥し去らざるを得ざる也。

文壇の寂寞たる既に久矣、その原因一にして足らず、世人もどよりその罪なきに非ずと雖も、而も作家か自

しも故なきに非るべし。

蓋しかの戯作者輩、多くは定見なく又品性なし。たゞ富豪の幫間となりて、青樓に一夜の快を貪る徒のみ。宜なり、彼等が社會より冷遇せられ、士君子の共に齒するを耻ぢしことや。渠等は市井の游冶郎に過ぎりしなり。稀には曲亭馬琴の如き、謹直なる人物ありしと雖、これは例外のみ。

然れども吾人は今の文學者——就中小説家——中、戯作者輩と選ぶ所なきもの、或は存在せざるなきかを疑はすんば非る也。

今の文士

一友あり、われに謂つて曰く、今の文士中眞に斯文の爲め、讀書界が今猶ほ幼稚の域にあるを慨するもの、果して幾何かある? 渠等の多くは主張なく定見なし、昔時の戯作者と其の差果して幾何? 否、定すべからざるもの、面を穿てるの言、未だ遽か否定すべからざるものあり。文士の天職、今更に、繰り返す迄なく、重く且貴し、この故にその品位や高からざるべからず、獨り怪しむ、現時の文士何が故に、自ら卑ふし自ら輕んずる

ら人の玩弄物たるを甘んずるは、慥にその一に數ふべきものならん。

何が故に爾か云ふ? 徒らに人の鼻息のみ之れ伺ひ、自己の天職を忘れて自ら輕んじ、世人の輕蔑を受けるをも顧さればなり。

曾ては文士保護の聲を聞きぬ、されど今の如き文士には果して保護せらるゝの價値ありや、況んや之を作家より要求するをや、己惚も亦甚たしといふべし。

去れどわれは、絶對的に今の文士を斥くるものにあらず、蓋し渠等の多くは猶ほ春秋に富む、今より修養に努むるも亦遅からざればなり。

起てよ作家! 奮へよ文士!! 卿等は人の玩弄物となりて自ら甘んずるか、苟くも一片の氣骨あるもの、誰か之を屑しとせん。

今や世は二十世紀に入らん、我國の前途益々多忙なるものあり、文士たるもの宜しく在來の弊風を一洗濯して、泰西の文豪と世界の騷壇に相馳騁するの覺悟な

くして可ならんや。卿等乞ふ修養に力を用ゐよ、日進月歩の重ねて言ふ、卿等乞ふ修養に力を用ゐよ、日進月歩の世にありて、一日怠らば一日人に遅るゝの恐あり、進んで新智識を得んことをこれ期せよ。

弦齋の日の出島

弦齋の『日の出島』今猶ほ『報知』紙上に連載せられつゝあり、その根氣のよきは眞に驚くの外なし、例によつて下らなき子供欺しには誠に閉口の至りなり、されど聞くが如くんば、讀者の歡迎を受けること終に往日の如きを得ずと、果して然らばこれ讀書界が一般に進歩したる證と見て可なるべきか、曰く否なり。

見よや、弦齋の聲價の漸く減ずると共に、他方に於ては青々園等が漸く得意ならんとしつゝあるに非ずや、渠の手になれる『新比翼塚』乃至『生首正太郎』的探偵實話は、少なからず世人より喝采せられつゝあるに非ずや。

この故に吾人は單に弦齋云々の一事を以て、直ちに世人の讀書眼が進歩せるの證となすの、甚だ早計に失するを覺ゆる也、思ふに弦齋が聲譽の衰へたる所以のものは、世人が必ずしも弦齋の手腕を認識したるが故に非ずして、例の新奇を好む我邦人の性癖として、一時青々園等の探偵實話が新らしきを見て、何の思慮もなく之に赴けるに非るなきか、曩に探偵小説、俠客小説、講談等の流行せるも、畢竟この理に外ならざりしな

ば、吾人は綠雨の言ふ如く渠等を驅逐せん、もし夫れ修養に努め、實力を養ふに至りては、吾人不敏と雖も敢て人後に落ちず、自ら進んで之を勉めんとす、綠雨足下、幸に安んぜよ。

漣山人を送る

戀愛小説を以て聞えたる硯友社中、別にメエルヘンの一派を聞き、主として幼少年が師友たらんとせる巖谷漣山人は、今回獨乙伯林なる東洋語學校の招聘を受け、去月二十二日の便船を以て、赴任の途に就けり、知らず、幼少年の失望果して幾何や。

思ふに山人は先天的に、メエルヘン作家たる資格を具へたるの人、その無邪氣なる言行は、最も少年の友たるに適す、氏が中途にして筆を小説に絶ち少年文學の壘に轉せるもの、蓋し自ら知るの明ありといふべきなり。

山人が巖谷の叔父さんとしての名聲は、儘に『從五位』『燒火箸』もしくは『友禪染』の作家、乃ち小説家としての漣山人が名聲よりも、遙かに大なるものありて存する也。而して山人が幼少年を愛し、幼少年が山人を仰慕するもの、實に驚くべきものあり。

らん。

吾人はわがこの推測の果して正鵠を得たるや否を知らず、されど予は予が推測の的中せざらんことを冀ふものなり。

綠雨の言

綠雨醒客『明星』紙上論として曰く、

近時青年雜誌が鋒を揃へて、先輩を攻撃するの意氣は甚た愛すべし、然れども青年諸氏にして、今の先輩を驅逐し、之に代つて現文壇を領せんとすれば、先輩攻撃は宜しく中止し去るべし、何となれば、是何等の効能もなければ也。攻撃に費すの力を傾けて之を修養實力の上に灌げ、若し修養あり實力あらば、先輩を攻撃せずとも、霸權は自ら諸子の頭上に來るべし、徒らに饒々の辯を發して、何の得る處なきは、眞に無用の勞働に非ずや。

と、説素より薪新なりとなさるれども、又一顧に價せずと言はんや、されど予輩が先進を攻撃するは、渠等をして反省せしめ、文士たる体面を保たしめんとするの微衷に出でたるのみ、もし不幸にして今の先進が、吾人の直言を容るゝ能はず、依然舊態に甘んずるあら

聞く、山人が居室宛然たる玩物店なりと、また聞く、山人常に近邊の幼少年等を己が膝下に集め、之にお伽話を語り聞かせその悦ぶさまを見て、以て自ら樂しめりと、這般の消息を知らば、山人がお伽話に成功せる所以の、必らずしも偶然に非るを知るに足らん。

あゝ、滔々たる所謂文學者、戀愛小説以外一步も出づる能はざるの間にありて、卓然眼を少年の教育に注ぎ、少年の教育家を以て自ら任じ、進んで少年文學なる一旗幟を樹立するに至れること、誰か之を嘆賞せざらんや。

大町桂月曾て曰く、紅露の小説以外、後代に傳ふるに足るものありとせば、我れは小波のお伽話を推さん乎と、まことに然り、吾人は少くも山人の小説が再讀するものあるを知らず、然れどもお伽話に於ける山人の技倆は、之を稱して古今獨歩といふも、必らずしも諛評に非るべきを信ずる也。

今や山人海外に航するも、教鞭を執るの傍ら、専らお伽話を研究せん志なりと聞く、よいかな山人が志や。吾人は大に山人が志を多とすると共に、切に山人が成功を祈るものなり。

今や帝國幾萬の幼少年は、鶴首して山人が無事歸朝を

待てり、山人たるもの奮勵一番、渠等が囑望に孤負する勿れ、一言山人の行を送る。

附記、本篇は予が病中執筆したるもの、意に滿たざる處甚だ多し、されど今之を訂正するの暇なし、姑らく他日を期せん、請ふ諒せよ。
(十月廿日稿)

月廼舍漫筆

つきのやまどか

新聞の講談

及び大隈伯の文學談に就ては、千八氏（森鷗外？）『二六新報』紙上に痛論せるあり。氏曰く、

(前略)新聞紙の講談を載する所以は他なし。讀者に促さるゝなり。讀者の促すは、われ謂ふに、一に懶にあり。新作を讀みて、その因果の連鎖を手繰りゆくは、舊話頭に耳を借すことの熟路を行かぬなるに若かず、是れ思ふに懶きなり。全冊を買ひて架上に挿み、時に抽き出し時に收蔵するは、日ごとに一紙に接し、隨ひて讀み隨ひて抛つことの、何の注意をも須ゐざるに若かず、是れ手を舉げ足を投ずるに懶きなり。此の如くにして、新聞紙の需要者に物草太郎多き限は、新聞紙の供給者をして講談を采録せしめずんば止まざるなり。傳ふる者のいばく。某老伯の談に、新聞紙を讀むもの、講談を讀むは、小説の戀を説き情を説くを聞くに倦みて、講談の名將勇士孝子貞婦を傳ふるを喜ぶに至りしなりといへり。殊に知らず、若し内務の檢官の我に許すことあらば、我はこれが反證を立つることの極めて容易なるを覺ゆるこ

と。論じ得て最も肯綮に中れりと云ふべし。斯る幼稚なる、殆んど取るに足らざる説を爲して得々たる者、豈此老伯のみならんや。吾人は茲に至て今の所謂、人も許し自らも許す、堂々たる政治家(?)輩の、文學上に於ける智識如何を疑はずんば非る也。借問す、所謂朝野の名士!、卿等果して文學を知るか?、はた文學の眞價如何を解するや?。

吾人は『太陽』に掲げたる、鳥谷部春汀氏の

◎政界の文學者

最も這般の問題を論破して妙なるを覺ゆ。曰く、
濱野茂雨宮敬次郎輩すら曾て代議士候補者となりて、人之を怪まざる
時代に於ては、文學者の政界に尊重せらるべき道理なく、隨て文學と政
治との調和し難きも亦自然の勢なり。若し濱野茂雨宮敬次郎をして能
く代議士たるを得せしめば、坪内逍遙、尾崎紅葉の徒は、彼等無比して
寧ろ代議士として成功するの人物たらんも、亦未だ知るべからず。而
も今の政界は、品性よりも勢力を好み、理想よりも物質を崇ぶが故に、
相場師も歡迎せられ、壯士の隊長も歡迎せらるゝに拘らず、獨り文學
者といへば、黨人は之を冷笑し、社會亦之に政治家たるの名譽を與
ふるを吝むものゝ如し。顧ふに方今の文學者にして黨人たり代議士た
るもの之れなきに非ざれども、彼等は慨して失意の境遇に居る者多く、

昔時の小説と作家

附、文士保護問題

否らずむば、只文學者たる故を以て、其の政治的技倆を十分に認識せられざるものあり。余を以て之を觀れば、文學者の政界に尊重せられざるは、是れ政界より未開を表示する所以にして、政治に對する國民の趣味尙ほ極めて野卑なるを證するなり。（氏は尙ほ、英國が古今を問はず、文學者にして好代議士たり、大政治家たる者最も多きを、歴史的に例を擧て證明せられ、後、現時日本の政界に於て最も勢力ある人物を問はり、世の所謂策士にして、次は野武士らしき地方豪傑なり。是れ主として政治家に對する國民の鑑識力頗る低きに由るを雖も、一は文學の趣味を解する政治家少なきに由らずんばあらじ。世には文學と政治との調和を謀らむとして、兩者の交通を聞くの必要を説く者あれど、滔々たる政治家殆んど文學の何物たるを知らざるに於ては、此の説容易に行はるべき望なきを如何せむ。試に見よ、議院の内外を問はず、

少くとも文學の趣味を解する政治家幾何ある。余は僅かに下の數人を見るのみ、曰く矢野文雄、曰く島田三郎、曰く田口卯吉、曰く末松謙澄、曰く高田早苗等はれなり。(之より此一人毎に評論せられ、後の斯の如く現時の政界には文學者若くは文學の趣味を解する者寥々晨星の如く、而して政治家として一世に時めける人物は、大抵野性にして唯だ鬭争に長じ、戰略に巧なる策士運動家のみ。蓋し今の政界を司配する者は、事實上地方の選舉區民にして、而して彼等選舉區民の思想は尙ほ頗る低く、文學者よりも寧ろ相場師を代表者として敢て怪まざるの狀態なるが故に、今の政界に文學者を容るゝの餘地は甚だ狹隘なるを知らざるべからず。是れ余の深く遺憾とする所なり。

と。嗚呼、人民の上流に立つ政治家が如斯き有様に
して、安んず能く文學の興隆を見るを得んや。願へば日
本文壇の前途、於戯、實に遼遠なる哉。

かゝなふれば僅々數十年の昔迄は、小説即ち草双紙の類を以て、眞面目の作と認めず、之を戯作と呼爲し、其作家を卑めて戯作者と呼びぬ。甚だしきに至ては、渠等を幫間等と同視し、(尤も或る一二の下劣なる作者に、斯る行ありしは事實なれど。)正士の讀むべからざる物となしぬ。故に斯界の泰斗たる馬琴の如きすら、詩人の天職を卑み、戯作者たるを厭ひて、徒らに儒者先生を銜ひぬ。

明治維新後、泰西の文物を輸入すると同時に、彼の進歩せる風潮に驅られて、昔時文學の最下位、否、文學以外に置かれたる小説は、今や反て文學の最上に位せんとす。されど是れ、一般社會の發達に因れる現象に非ずして、唯獨り文壇自身の發達に過ぎざる也。從て社會の多方面は、依然として昔の戯作者を以て今の文士を遇し、妄りに小説を以て有害無益視す。噫、斯の如き文學に冷淡なる、文學を誤解せる、否、全く文學を解せざる社會に向て、僅か或一部の人、口を揃へて『文士の保護』を絶叫すども、畢竟徒勞に屬し、所謂『馬の耳に念佛』に過ぎざる也。思はざるべけんや。

●西鶴と馬琴

馬琴、西鶴を評して曰く、『此人肚裏に一字の文學なし。』
●雖も、よく世上に渡りて、戯作の草紙あまた著はし、一時虚名を高せり。……人々今日目前に見る所を述べて、滑稽を盡すことは西鶴より始めり。さばれ専ら遊廓のよしなしことのみ綴りて、其書猥雑なりしかば世の識を得脱れず。云々。評の當否は知る人ぞ知るべし。されど、馬琴は凡て己に勝る者を貶し、自を高ふせんとせし野心家なるを忘るへからず。
馬琴の著書を読みし者は、何人とも雖も著者を聯想して、頗る品行方正の君子、殆んど極端に近き儒教的道德家ならんど、思惟するなるべし。然るに實際に於ける渠の行動は、全く之に違へるものあり。渠が其師京傳に對せし振舞の如き、最も、渠の信奉せる孔孟主義に、悖れるの甚だしきものに非ずや。其他、他人の文を剽窃して耻ぢざるが如き、小人的の行爲、歷々擧て數ふべからざる也。
吾人は、言行全く相反せる、偽道德家瀧澤馬琴よりも、寧ろ天真爛漫たる、粹法師井原西鶴を愛する者也。
池本瘡星曰く、『馬琴は細工師也。西鶴は然らず。』と。

●肉體的快樂と精神的娛樂

文學士久保天隨氏、曾て曰く、
●の陋劣甚しき肉體的慾望に伴ひたる物質的傾向は、今や一世を風靡して、正にその絶頂に達し、之を社會のあらゆる階級に見るに、皆然らざるはなく、醉生夢死の間にありて、閑居爲す所の不善は、賭博飲酒漁色の類、惡風弊俗の醜態されつゝある者、亦宜なりと云ふべし。『戰勝後の所謂膨脹的日本は、此の如くして、一面には、早く社會内部の腐敗を招致し、邦家前途の大計、將に奈何とすするなきに至らむとす。その之を救済挽回するの一事は、志士の焦心苦慮すべき所。而して余は、精神的快樂を勸奨するを以て、その極致を爲さむとす。教育の如き、宗教の如き、殆んど根柢より一國の人心を改進し得べきもの、その須要は、今復た贅せず。而して文學は、絶對神聖なる最高美術として、その普及は、確に社會を美化し、人格を至高の高尚ならしむ。かの文學なき生活、文學なき家庭、文學なき社會は、固より人をして嘔吐を禁ぜざらしむ。故に文學の鼓吹は、今の時に方りて、最もその必要を認めつゝあり。若し夫れ文學亡國論を主張する者に至りては、其愚や實に及ぶべからず余は此輩に對して、瓜哇邊の蠻島に退隱すべきを、忠告せしむべし。』
云々。頗る痛快也。誠に氏の言の如く、今や、宗教家と云はず、教育家と云はず、政治家と云はず、實業家と云はず、社會のあらゆる方面皆濁れり。渠等は概ね美を解せず、情を解せず、況んや詩をや、渠等は只色慾と拜金との餓鬼のみ。渠等が肉體的、物質的慾望速かに來り會して吾人の舉擧を助けよ!!。三十三年九月作

に汲々として、精神的高尙なる慾望を知らず、其沒趣味なる、其沒理想なるも亦怪むに足らざる也。

彼の華族なる者を見よ、渠等は皆巨萬の財産あり、毫も衣食の憂ある者に非ず、又職業なし、故に多くの閑暇を有す、從て渠等の多くは遊墮放逸に趣き、たゞ淫樂を事とし色に荒び、晏如として爲すなし。而して、渠等は已に文學の研究に缺くべからざる、Time and Moneyとを有せり、何ぞ、色を捨てて以て此事を力め、人心道德の腐敗を救済せざる!。吾人が見聞の狭き、未だ曾てかゝる者ありしを聞かざる也。國民の上流に立つ華族已に然り、一般人衆の文學に冷淡なる、宜なりと云ふべし。

當今の社會の狀態夫れ斯の如し、從て文學思想の普及は日一日に其急なるを覺ゆ。然れ共此腐敗せる、墮落せる社會に對して、文學的趣味を鼓吹せんは、吾人の微力なる、殆んど不可能の事に屬せんとす。されど吾人は記憶す、此濁流以外に立ちて、血あり、涙ある青年諸君の健在せるを。吾人は全國の青年諸君と共に、熱心に、眞摯に文學を研究し、完全なる社會、圓滿なる國家の完成を、他日に期せんと欲する也。來れ、争ふて來れ! 熱誠に富める滿天下の青年諸君!!!。

つきのや

空を仰ぎ無數の星を見る毎に宇宙の大の思はるゝかな
俗人は狂ゆる者と笑ふならむ美にわくがれて詩に瘦す我れを
別れ行く男を又も呼び戻した。打笑みしうら若き女」
一目見て顔赤らめつ俯きて打わなける小女子が戀」
美しき醜さもたゞ寫真かなレンズは人に媚ぶるを知らず
どり梓の蓋引き抜きて曝露せんとレンズを見れば閉ぢずありけり(以上二首寫眞を詠める)

同人偶語

●新陳代謝は、これこの世の常理、少しも怪むに足らぬ、否是非ともさうなくつては、ならない筈なのである。が、文界のみは今も尙、この定則に外れて居るのは、抑々何の故であらう?
●紅葉露伴が、大に努めたのは、既に一と昔の事である。渠等は、もはやその時代を、失つて居るのである。

けれども渠等が文壇の明星として、仰がれて居るのは、今も變りはないのである。然り、渠等は今も尚、その地位を占めて、傲然大家と言ひ、われも許して居る。○けれども、これは畢竟後進中、紅露を凌ぐに足る技倆を、有するものがないからだ。鏡花や、天外や、宙外や、抱月や、所謂新進作家は、多士濟々たる有様であるけれども、之を紅露に比すれば、少しく見劣りするのには、争はれない事實である。ともかくも紅露二家は、明治文壇の二明星として、後代に傳ふる價値は、充分にあるのだ。今の如く幼稚なる文壇に、一葉や紅露の出でたのは、寧ろ異とすべきので、後代に傳へても、決して耻しくないと思ふ。(以上△△△)

○帝國少年議會熊谷支部で、雑誌を發刊するさうであるが、文學的のものではないらしい。併し予輩は、埼玉文壇のため、健全に發達せんことを、祈望するのである。○本號から少しく軋載を改めて、從來の欄別を全廢した。尚ほ追々改善して行くつもりである。

○編者の不熟練と、創刊の際とて萬事不整頓なるので、本年中の本誌は、終に豫期の如くなる能はぬかつた。これは予等の遺憾とする所で、又會員諸君に對して、深く慚謝する所である。明年からは、一層の奮勵を以て、この失敗を恢復する覺悟であるから、どうか御寛恕を望むのである。

○八洲日報紙上、俳論が中々盛んであつた。言ふところ多くは罵詈に傾いて、聞くべき價値は少なかつたが、

會告

○本號も又々遅刊するの止むを得るに至り候これに就きては記者は勿論非常なる苦心を以て定期に遅れざらしめん事を期し候へども萬事豫期の如くならず遂にこゝに至り候は深く謝する所に有之候なりながら徒らに期日を誤らざることを欲して粗疎杜撰なる冊子を發刊致候は記者の忍びざる處に有之従つてよし多しを期日誤るとも少しにても完全ならしめんと欲するものには御座候幸に同人の微衷御諒承被下度候とて今回左の二先生は本會の主旨を賛せられて贊助員たるを諾せられ候

文學士 戸澤姑射 高濱虛子

○本號にて會費切の諸君は送本の姓名を朱書致置候に付此際大至急御送金相成度候也
○俳句は川島奇北先生の選評を乞ふ事と相定め申候猶和歌漢詩も夫れに依頼仕るべく候
○會則又々訂正仕候就ては冊尾に記載し置き候につき御熟覽願上候

寄贈品謝告

- 智識の戰場 第十七號
 - 詞友雜誌 第二十二號
 - 鳳翔 第二十九號
 - 明治文壇 第五號
 - 櫻洲詞叢 第九號
 - 樸の下風 第七十九號
 - 秋水 第一號
 - 初霞 第一號
 - 青年文庫 第八號
- 福島 神洲青年研究會
京都 全國少年詞友會
茨城 青年詞壇社
若狹 明治文學會
備中 櫻洲文社
鳥取 模園吟社
愛知 天聲詩社
越前 帝國新詩會
千葉 三省會館

舊派の旗色の惡かつたのは、新趣味普及の結果として、深く欣賀するのである。
○本年下半季になつて、文壇は多少活氣を帯びて來た。幽芳の己が罪や、天外のはつ姿や、宙外の腐肉團や、天外の女夫星など、中々に見るべきものがある。
○地方文壇も多少色めいて來た、函館には北斗生れ、神戸に新潮出で、大坂に小天地出でた。その他、みの虫や、初あられや、文星や、殆んど枚舉に苦む程だ。
○東京北上屋で發行する雜誌は、せれも瓦石累々たるものだが、それでも買つて讀むものも居ると見える。尤も名古屋の文壇などが、歡迎せらるゝ世の中だから、怪しむに足らぬかも知れぬ。(以上鳳山)

第三號原稿之切は十二月卅一日限とす

次號には大に俳句短歌漢詩と募集す!!!

但し何人とも投稿するを得

明治卅三年十一月 鴛鴦文學會

鴛鴦文學會規則

- 第一條 本會は鴛鴦文學會と稱し本部を埼玉縣北埼玉郡忍町大字行田本町三丁目八十五番地山田方に置く
- 第二條 本會は全國文學志者と共ニ文學を研鑽し斯學の鼓吹發達を謀るを以て目的となす
- 第三條 本會は前條の目的を達せんが爲め毎年四回機關雜誌「鴛鴦文學」を發行して會員に頒布す
- 第四條 本會會員を分ちて贊助普通の二種となす
一、贊助員は斯道の名家にして本會の主旨を贊助せられ役員は推戴せる者
- 第五條 普通會員は第六條の會費を納附したるもの
- 第六條 編輯員若干名會計主任庶務主任各一名
- 第七條 入會金は八錢、二季分十六錢、四季分卅二錢、入會金は一回限、金十錢、一季毎に郵税貳錢(忍町居住者は不要)
- 第八條 本會へ加入せんとするものは隨意の願書に入會金を三分以上の會費を添へて申込るべし
- 第九條 中途退會せんとするものは理由書を差出すべし
- 第十條 但し既納の會費は返附せず
- 第十一條 投稿は概今一切本會宛たるべし、外必ず掲載すべし
- 第十二條 會員の投稿は規程に背反せるもの、外必ず掲載すべし
- 第十三條 本會へ金圓を送附せんとする時は必らず爲替を以てし武藏行田局宛振込るべし受取人は山田良三とし郵券代用は一割増たるべし
- 第十四條 前納會費盡きたる時は送本の姓名を朱書す
- 第十五條 會費盡きたる時は直ちに送本を停止す
- 第十六條 返信を要するものは相當の返信料添附せらるべし然らざれば回答せず不足税郵税先拂等の郵便物は受領せず

本誌略則

- 本誌は當分の内毎年四回（一、四、七、十）發行とす
- 本會々費は一季分八錢四季分卅二錢一季毎に郵税二錢を要す
- 本會への送金は爲替を以てし拂渡局は武藏行田局郵便代用一割増
- 廣告料は五號活字一行廿四字詰金八錢とす
- 廣告料會費共に前金たるべし

投書規程

- 投書は何人にも許す
- 投稿種類は凡て文學趣味ある作品に限る
- 用紙は半紙又は罫紙一行廿四字詰とす
- 句讀は各自施すべし但し一字に算す
- 假名は凡て平假字たるべし
- 紙上の匿名は隨意なりといへども原稿には必ず詳細なる宿所姓名を記入すべし
- 原稿の採否は一に記者の權内に在り
- 原稿は採否にかゝらず一切返戻せず
- 不足税または郵税未納の原稿は受取らず
- 投稿は凡て埼玉縣北埼玉郡忍町大字行田本町二丁目五十七番地石島郁太郎宛送附すべし

明治卅三年十二月五日印刷
明治卅三年十二月七日發行

埼玉縣北埼玉郡忍町行田本町二丁目五

編輯兼發行者 石 島 郁 太 郎

東京市麹町區六丁目五番地

印刷者 中 一 美 重 藏

東京市麹町區內幸町二丁目五番地

印刷所 シヤパン、ダイムス社

發行所

鴛鴦文學會

埼玉縣北埼玉郡忍町大字行田
本町三丁目八五山田良三方